



エクアドル道中記

①

竹田 英夫

羽田—キトー

エクアドルの首都 キトーを目指して生まれて初めてジェット機に乗り込んだのは昨年(昭和37年)11月15日。表面は何気なくよそおいながらも 入学式の門をくぐる小学生のような気持だった。機内から送迎台にいる見送りの連中に座席を知らせようと 小さい窓からハンカチを振ったり 8ミリののぞかせて見たがだめ。かんじんの女房までが機首に近い窓の方に視線を向けている(そちらは1等の座席です)。2等(Economic class)の座席は 思ったよりせまききゆうくつで「汽車の1等の座席と変わらない」と書いていた外国旅行案内に“うそをつけ”といいたくなる。やがて滑走路について 赤い標式灯が後方に流れ始め地上を離れた一瞬 久米の仙人になったような気がした。眼下にちらっと山ぎわを切り開いた団地の建物が見えたのも東の間 白波荒れる太平洋上に出る。

旅行前に留学している友人からの便りで ジェット機は非常に乗り心地が快適だと知らされていたので 座席ベルトと禁煙のサインも消えて一安心と煙草に火をつけたとたん がたがたとゆすぶられ座席ベルトのサインが出

る。こいつは変だなと心配になったが どうにも致し方がない。サインのままにベルトをしめたりはずしたり 煙草の火を消したりつけたり数回繰り返す中に 急上昇を始めてやっと思はれ機は落着いた。もう視界には空と海しかない。雲が綿をちぎったように下方に浮かんで その隙間に白波を立てる太平洋が広がっている。機内ではスチュワーデスがマイクに合わせて救命具のつけ方をにこやかに実演している。落ちればどうせそれまでだろうなどと思っているうちに今度は食事。飛行機の食事は時差の関係で1日5度位になり兼ねないので 用心して食べた方がよい。羽田を飛び立ったのが午後1時頃だったが 午後3時を過ぎると前方から夕暗がぐんぐん迫って来て日没となり 夜の中に飛び込んで行く。

アンカレッジに午後6時半頃到着。もう真暗だ。ここは給油するだけで機外には出られない。昇降口まで出てみたが 非常に冷たい空気が流れ込んでくる すぐに飛行場を飛びたつたが 窓外に大きな星が冷く1つ光りアンカレッジの街の灯が螢火のようにうるんで見え 眼下は白一色につつまれたアラスカの山々が連続し その谷間に灯がぼつんとともっていた。午前1時を過ぎた頃窓が白み始め やがて雲海の中に美しい日の出が見える。もう間もなくサンフランシスコだ 路上に無数の豆粒のような自動車が整然と走っている。

午前2時(サンフランシスコ時間で 午前8時)サンフランシスコ到着。税関で荷物検査が始まる。検査の最後に箱に入れた名刺が転がり出た。係官はその名刺を



←
羽田を出発するエクアドル調査団(左から小野広一郎 石原産業 竹田技官 古谷博 石原産業の各氏)

→
赤道標示碑
(標高 3000m)



しばらく見ていたが「貴方は地質調査所の方ですか？」と聞く。「そうです」と答えたとたんに態度が変わってたいそう丁寧になり 後は荷物をほとんど調べなかったのには驚いた。 海外旅行をする場合手荷物の中に名刺を入れておくと 都合の良いこともあるので念のため

さて次のパナマ行きに乗り込む。 もうすっかり朝でしかもこの日は 時差の関係で昨日と同じ日付の11月15日。 1日もうけたような気がしたが これは帰途ハワイで1日失って帳消しになってしまった。 やがて例のごとく滑走路を走り始めたが 今度はどうしたことか元の場所に引き帰してきた。 飛行機が故障だから降りてしばらく待たうというので待合室にいたが いろいろになおる気配がない。 その午後3時までホテルに待機して欲しいということでマイクロバスでホテルに連行された。 ここで睡眠不足を回復すべく一寝入りしていると電話で午後7時半まで出発延期と知らせて来た。 ついてないときは仕方がない(気にしない 気にしない)と覚悟してサンフランシスコ見物に出かける。 夕暗のせまる金門橋にまで足を伸ばしたが 堀江青年のような感激はなく市中も東京の中を歩いているような感じで たいして珍しくもない。 ただ立体道路の整備には感心した。 昏れなむオークランドをながめた後ホテルに帰り 小雨の中を飛行場に向かう 今度は無事離陸。 次はロサンゼルスと思っていたら 夜中の午前2時頃グアテマラに到着した。 ここで降ろされて眠い目をこすりながらまたホテルに連行される。 一風呂浴びてベッドに入ったときは午前4時。 翌朝? 教会の鐘の音に目を覚まし朝食をとりに行く。 ここのホテルのメイドは顔立ちが日本人にそっくりで おまけに花がら模様のブラウスにたもとがつけてある。 また差し出されたパンの容器の竹かごが 日本のものでそっくりだ。「日本製か?」と尋ねたら ここでできたものだとのことだった。

この付近に来るともうスペイン語がすっかり幅をきか

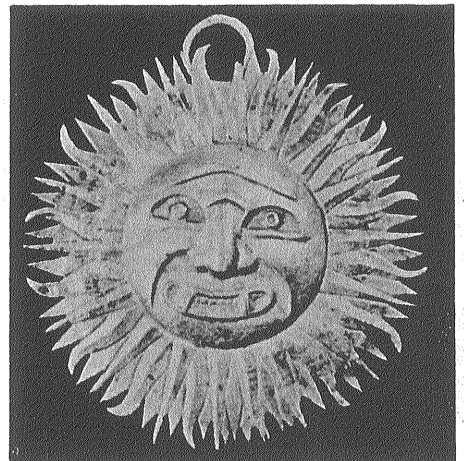
せている。 最近のニュースではケネディ大統領が訪れて大歓迎をうけた直後 革命を起こしてアメリカをがっかりさせたこのグアテマラ市は標高1480m。 熱帯に近いが 高原の感が深く気候は快適だ。 朝 市中を散歩したが ソニーの看板がかかげられており はだしの男の子が“新聞”と叫びながら売り歩いている。

昼前に さて出発と飛行場に向かったが またまた飛行機の故障で逆もどり。 これは帰りの飛行機の中で聞いた話だが 帰りも大分遅れたのでパン・アメリカン(Pan American)航空はサービスが悪いと話したところ隣に居たベネズエラの小母さんに「それは安全運転のためです」といわれてなるほどそれも道理と思った。 夕方になって再びバスに乗り込み飛行場に行く。 このバスが市中から市外をぐるりぐらりと観光バス式に回ってからやっと飛行場に到着する。 車窓から富士山に良く似た火山が噴煙をあげているのがみえた。 やっと離陸してパナマに向かう。 このあたりに来ると万事がのんびりしていて 東京からサンフランシスコまでは機内の座席が指定だったが こちらではお好きな席におすわり下さいと来る。 今度は羽田を発ったとき以上に機がひどくゆれる。 サンホセに行くという隣の美しい女性にみとれている中 何とかパナマに着いたが 実際はつい落寸前だったらしいと後で聞いて肝を冷した。 飛行機の中ではたいいていの人が英語とスペイン語を喋ることができるようだ。 こちらは両方とも怪しいものだが ことばが通じなくてもそれほどの不便に出会わなかったのは幸いだった。

夕方7時頃パナマ到着。 ここは実に暑い。 荷物を持った手のひらが汗でべっとりとなる。 飛行場でホテルの交渉をし すったかもんだした後 話合いがついて飛行場の近くのホテルに行く。 午後10時頃やっと夕食にありついたが 全く時間の空費には参ってしまった。



先インカ時代の首像



インカ時代の「太陽」を型どった金メダル(直径13インチ)

到着の翌朝目がさめてカーテンをひくと 緑の原野が広がって武蔵野に似ている。 キトー行きの飛行機は翌日しかないのだから パナマ市と有名なパナマ運河の見物に出かけた。 運転手は黒人で観光コースは心得たものだ。 政府高官は汚職してよい家に住んでいるなどと嘆きながら運転し 教会の前を通ると必ず十字を切る。 パナマ運河沿いにはアメリカ軍の兵舎がずらりと並び星条旗がひるがえっている。 展望台でちょうど船の通過するところを8ミリにおさめたが 昔教科書で習った通りである。 両側から船を引張る車が日本製とか？ パナマの下町はごみごみしてあまりきれいでない。 日本では秋たけなわの時期というに こちらではホテルに帰ってからプールで一泳ぎした。

11月17日 酷暑のパナマを出発すべく飛行場に行く

たまたま飛行機を待つ間に偶然パナマ駐在の日本大使にお目にかかり 旅の労をねぎらわれて恐縮した。

さてこれまでの飛行機はジェット機だったが 今度はプロペラ機。 ぶるるん ぶるるんとのんびり飛び始める。 ジェット機にくらべて低く飛ぶため 窓外の景色も変化があって面白い。 しばらく太平洋岸に沿って進む その中コロンビアの密林上空にかかる。 濁流が密林中を蛇行している。 はるかアンデス山脈の方には入道雲が乱立してながめはすばらしい。 やがてカリ到着。 給油する間ちょっと機外に出る。 ここは高地にあるため パナマよりはずっと涼しく 真紅のカンナや色とりどりの草花が飛行場の花だんに咲き乱れている。 カリを出発していよいよ目的地キトーに向かう。 入道雲の中に突込むと それまで快晴だった空が一変して雨となり 密林の広野が消えて眼前にはげしく侵食を受けた秃山が迫ってくる。 切り立った絶壁の峡谷の中をしばらく飛んだ後 荒涼とした高原の上に出た。

もうすぐキトーに着くという知らせがあり 機は着陸

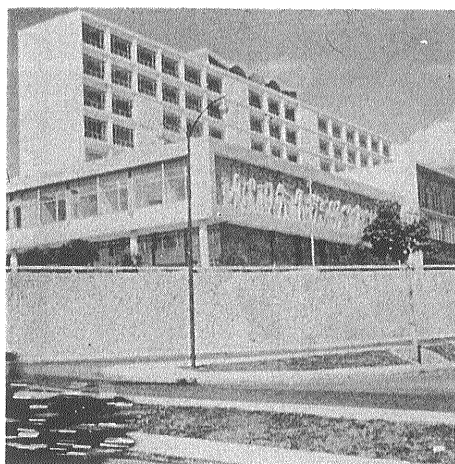
姿勢に入って滑走路がぐんぐん浮き上がってくる。

霧雨に煙る飛行場を窓からすかして見ると 相当たくさんのお迎え人がいる。 グアテマラから大使館あてに電報をうっておいたので 誰か来てくれているだろうと思いがらタラップを降した。 税関は英語がまるで通じない。 あらかじめ税関での必要なスペイン語は用意していたが 全然別のことを聞かれてしどろもどろの奮闘の後 やつと通過できた。 税関を出たとたん なつかしい日本語で2人の若者に 「日本の方ですか？」と声をかけられ やはりお迎えがあったと感謝したが これはこちらの思い違いで この色黒き2人の日本人はキトーの大学に留学しており 今日には彼らの恩師がはるばる日本からくるというのでお迎えにきたが 結局その先生はこられず 私たちを見つけて声をかけてくれたものとわかった。 すぐ大使館や関係者に連絡してくれたので路頭に迷うことなくどうやらホテルに落ち着いたが 後で電報はまだ到着しおらず 最初の到着予定日には鉱山局長から新聞記者までお迎えにきていた由を聞き 遅れてきてよかったような悪かったような変な気持ちだった。

エクアドル——それは赤道を意味する

さてこれから本題に入るが その前にエクアドルをご存知ない方も多と思われるので 一応この国のあらましを紹介しておこう。 エクアドル共和国は 南米の太平洋岸に面した小国で コロンビアとペルーにはさまれており ちょうど赤道直下に位置しているため 「赤道」という名前をとってエクアドルと名づけられている。

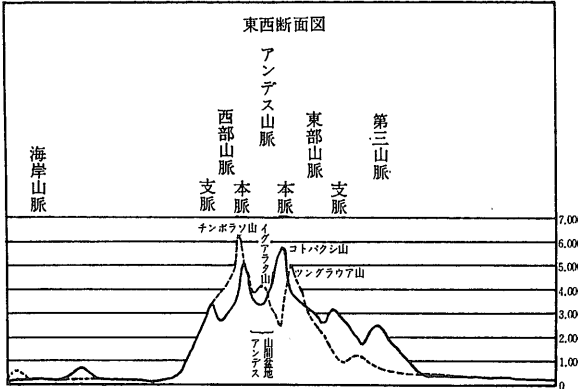
面積 スペイン植民地時代は領土が广大であったが その後種々の変せんを重ね 現在は生きた化石の島として有名なガラパゴス島を含めて約22万平方キロメートルとなり 南米ではウルグアイに次ぐ小国である。 この広さは日本の面積から北海道と九州を除いた位と考えれ



国会議事堂 (キトー)



アマゾン流域の首狩り族



(エクアドル共和国鉱物資源調査部報告から)

ばよい。

歴史 この国は先インカ時代から太陽の国として栄えたインカ帝国時代、そしてスペイン植民地時代を経て現在の共和国時代にいたるまで、波乱に富んだ歴史を持っている。先インカ時代のことはほとんどわかっていないが、各地に多くの種族が住んでいた模様で、紀元前に作られた粘土細工の壺や首像などが発掘されている。私たちがチンボラソ州のアラオ鉱山のキャンプを訪れたとき、ここにいるアメリカ人が、この先インカ時代の壺をいくつか集めており、火山灰の下を掘ると人骨なども出

てくると話していた。

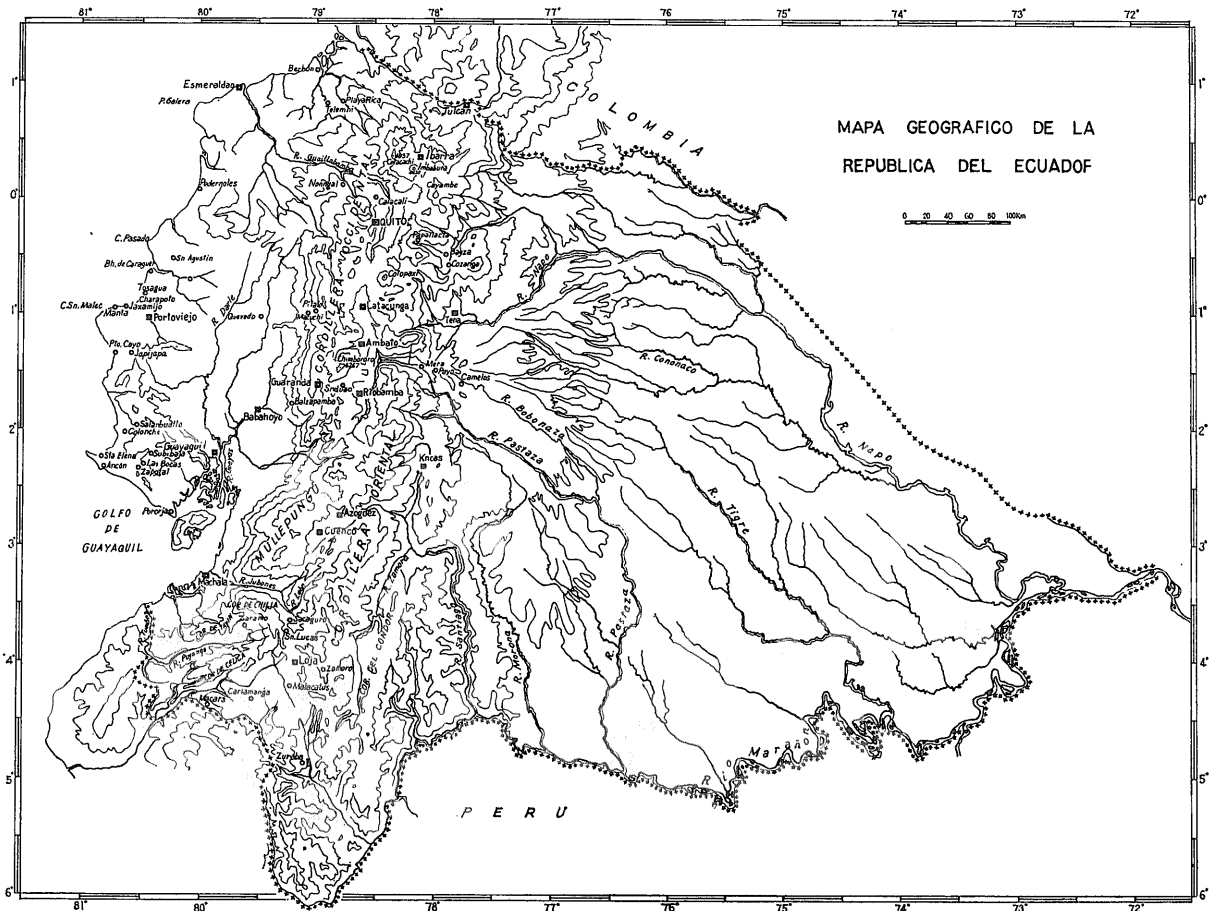
15世紀に入ってカパク王 (Huayha Cápac) がこれらの土着人を征服してインカ帝国の支配下に置いたが、その後インカ帝国を2分して、2人の息子のウェアスカル (Huáscar) とアタワールパ (Atahualpa) に分け与えて統治させた。しかしカパク王の死後、この腹違いの兄弟はお互いに戦争を始め、アタワールパがウェアスカルを打ち負かしてクスコ (Cuzco—現在ペルーにある) とキトー (Quito) を占領して自分の支配下においた。

しかしこの戦争によって疲へしているとき (1528年)、スペイン人のフランシスコ・ピサロ (Francisco Pizarro) の攻撃を受けてたいした抵抗もなく、11世紀から続いたインカ帝国はあっけなく亡び去ってしまったという。

このときの面白い話がある。インカ帝国の連中は皮ふの白いスペイン人に驚いたが、それよりも南米でかつて見たことのない馬にすっかり驚いて戦意を失ったため、やすやすと負けてしまったということである。

1534年12月6日、サンフランシスコ・デ・キトー (San Francisco de Ouito) としてスペインの植民地となり、これから約3世紀にわたってスペインの統治が続いた。

18世紀に入ってか、酷な植民地政策に混血原住民の抵抗



エクアドル共和国地形図

が始まったが 1808年ナポレオンがスペイン軍を破るに至って独立運動が急速にたかまり シモン・ボリーバー (Simon Bolivar) 将軍の率いる独立軍が各地でスペイン軍を打ち破って 南米の多くの植民地が次々に独立していった。このボリーバーの銅像は南米各国にあり パナマでは貨幣単位がボリーバー (1 ボリーバー≐1 ドル) となっており またボリビアもこの将軍の名前から由来している。ボリーバーは今でも独立の父としてあがめられている。1822年5月24日 ボリーバー将軍の下に居たアントニオ・ホセ・デ・スークレ (Antonio José de Sucre) 将軍がキトーを解放して独立宣言が発せられた。これを記念してエクアドルの通貨はスークレ (1 ドル≐20スークレ) が単位となっており 硬貨や紙幣にはその肖像が印刷されている。このときの独立宣言書は今でもキトーのサンフランシスコ寺院に保存されており たまたまこれを見せてもらったが 皮表紙の大きな分厚いノートに肉筆で書きつづられてあり これを説明してくれるエクアドル人は誇らしげな満足の笑みを浮かべていた。

1830年共和制が公布されて初代大統領が選ばれた後 今日にいたるまでこの制度が続いてきたが この間にしばしば政変が起り 大統領がそのたびに変わっているエクアドルでは大統領が更迭されると 大臣はもちろん局長から課長クラスまで首のすげかえが行なわれ 政策も一変するとのことで 私たち日本人にはちょっと想像がつきにくい。

1960年の第1次日本鉱物資源調査団がエクアドルを訪れたとき この政変に出会って1ヵ月近くもキトーに足止めされ 当初の予定がすっかり狂ってしまったことはまだ記憶に新しい。しかしこれらの政変は新聞には革命と騒がれるが キューバのような社会革命と違って 大統領の追放が関の山で 一般大衆の生活とはあまり関

係がないというのが実情らしい。

人口 エクアドルにはインディオ 混血 白人 黒人などが住み さながら世界の人種展覧会の観がある。

将来世界国家でも形成された暁には どの国でもきっとこのようになるだろう。

1959年6月当時の資料ではこの国の総人口は4,169,204人となっており その内訳は第1表にみられるようなものである。この表をみるとシエラ (Sierra) と呼ばれるアンデスの山岳地帯にもっとも人口が多いのは 後で述べるように気候風土の関係だろう。もっともアマゾン河の上流にあたるオリエンテ (Oriente) 地帯は有名な人間の頭を縮小してしまう首狩り族が生存しており いまだに人口が明らかでない。最近はこの首狩り族も商売が繁生しないらしく 本当の人間の縮小された首も1こが2,000ドルから3,000ドルの高値を呼んでいるとのことである。ちょうど私たちがいたとき再び人口調査が実施されたが 現在はこの国の総人口は450万人位に増加している模様である。この国に住む外国人はアメリカ人が最も多い。日本人は大使館員とその家族の方まで入れて10名位であるため 必ずといってよいほど日本人は支那人と間違えられてチーノー (Chino) と呼ばれる。このチーノーということばは戦前日本人がチャンコロと呼んだものと大差のない軽べつの意味が含まれている。しかし日本人だとわかると相手はたいへんいていねいになり 尊敬のまなざしをもって迎えられる。これは恐らく野口英世の功績や 日本製トランジスタラジオが幅をきかしていること また最近古川拓殖の人々が入植して マニラ麻の栽培に成功していることなどが原因しているようで対日感情は非常によい。

気候および雨量 この国は赤道直下にあるので

州	面積(km ²)	人口	州 都	人口
山岳地帯 (Sierra)				
ピチンチャ (Pichincha)	16,768	463,812	キトー (Quito)	402,000
アズアイ (Azauy)	7,799	315,008	クエンカ (Cuenca)	62,000
チンボラソ (Chimborazo)	6,161	275,461	リオバンボ (Riobamba)	40,000
ロハ (Loja)	11,494	293,454	ロハ (Loja)	26,000
ツングラウ (Tungurahua)	3,204	231,112	アムバート (Ambato)	42,000
コトパシ (Cotopaxi)	4,614	204,341	ラタクンガ (Latacunga)	32,000
イムバブラ (Imbabura)	4,803	177,813	イバラ (Ibarra)	25,000
ボリーバー (Bolivar)	3,216	141,310	グアラング (Guaranda)	20,000
カニヤール (Canaar)	2,677	122,284	アゾグエス (Azogues)	18,000
カラチ (Carchi)	3,582	96,990	トルカン (Tulcan)	19,000
海岸地帯 (Costa)				
エスメラルダス (Esmeraldas)	15,886	100,571	エスメラルダス (Esmeraldas)	20,000
マナビ (Manabi)	18,923	569,049	ポルトビエホ (Portoviejo)	28,000
ロス・リオス (Los Rios)	5,937	205,637	ババホージョ (Babahoyo)	17,000
グアヤス (Guayas)	21,259	772,994	グアヤキール (Guayaquil)	610,000
エル・オロ (El Oro)	5,925	121,029	マチャラ (Machala)	12,000
ガラパゴス (Galapagos)	7,811	1,790		
東部地帯 (Oriente)				
ナポ (Napoo)	不明	18,000	テナ (Tena)	4,600
パスタザ (Pastaza)		16,000	プジョ (Puyo)	6,500
ザモラ・チンチペ (Zamora-Chinchipe)		5,601	ザモラ (Zamora)	1,100
モロナ・サンチャゴ (Morona-Santiago)		18,868	マカス (Macas)	3,000

第1表 エクアドルの人口 (1959,6現在)

地 帯	地 区	年間平均降雨量 (mm)	平均気温と高度
海岸地帯	乾燥地区	200~700	Santa Elena半島 El Oro Manabi および Esmeraldas 州の海岸地区で平均気温24℃前後である
	湿润盆地	1,340~2,200	海岸山脈以東の平地地区で平均気温25℃前後である
	アンデス山麓	1,740~4,000	高度600~1,600m程度で温度22℃前後である
山岳地帯	乾燥渓谷	200~350	Malacatus Palmira QuitoおよびIbarra付近の北部地区の高度1,800~2,800mで平均気温15~19℃である
	アンデス中間盆地	450~1,240	高度2,500~2,800m付近で温度14℃前後である
東部地帯	山脈高原	1,000~2,000	高度3,600~4,000m付近で気温A℃前後である
	アンデス山麓	2,100~4,900	高度500~1,100mで温度21~24℃である
	アマゾン平原	2,800	高度100mで平均気温は28℃前後である

(第1次調査団 1960の資料による)

第2表 年間降雨量と平均気温

区 間	距離 (km)	区 間	距離 (km)
Quito - Guayaquil	425	Babia - Chone	79
Quito - San Lorenzo	347	Santa Rosa - Piedras	75
Sibambe - Azogues	111	Machala - Pasaje	25

第3表 鉄 道 敷 設 距 離

熱帯性気候に支配されていると考えがちであるが 一般に高度が200m上昇するごとに気温が1°C宛下がる割合になっているため 低地帯はもちろん熱帯性気候で暑い 山岳地帯は温暖で快適な気候である。たとえば首都のキトー(標高2850m)では年間の平均気温は13°Cといわれており 日中は相当暖かいが 夜に入ると冷え込んできて火が欲しくなるといったぐあいで 一寸赤道直下にいるなどとは考えられないほどである。私も熱帯地方を想像して薄い肌着しか持って行かなかったため かぜをひいてしまい おまけにかぜなど縁がないだろう と思って薬も持参してなかったの で 困った経験がある。

しかし太平洋岸のコスタ(Costa)地帯やアマゾン上流のオリエンテ地帯の低地帯に行く と 結構暑い。今年の正月太平洋岸にあるマント(Manta)まで出かけたが 日本の盛夏と変わりがなく 海水浴客でにぎわっていた。キトーのホテルでグアヤキールの水産研究所の所長をしているフランス人と知り合いになったが この人は日本にも3年位いたことがあり 「日本の夏よりもグアヤキールの方が涼しくしのぎやすい」と話していた。結局これは湿度が低いことと フンボルト海流(寒流)の影響によるものらしい。エクアドルは一年を通じて四季の変化はないが 雨量は Invierno と呼ばれる冬期(12月~4月)に多く Verano と呼ぶ夏期(5月~11月)には少ない。後で述べるように 私たちが調べたマクチ鉱山付近は調査期間がちょうど雨期に一致したため 毎日午後から猛烈な霧と雨に悩まされた。しかし人夫の連中の話では夏期はほんの2~3日しか雨が降らないそうである。各地の平均降雨量と気温については 第2表を参照していただきたい。

交通 この国の鉄道は日本のように発達しておらず キトーからリオバンバ(Riobamba)を経てグアヤキール(Guayaquil)まで延びるものと キトーから北のサン・ロレンソ(San Lorenzo)まで至る2幹線の他 地域的な支線が数本あるに過ぎない。しかしこれらの鉄道は日本のいなかの支線よりも悪い位で 汽車の旅はあまり快適とはいえない(第3表)。これに比べて道路は パン・アメリカン高速道路がエクアドルを縦断している他 海岸地帯と山岳地帯を結ぶものもいくつか発達し 定期

農 産 物	年間生産量(トン)	耕 作 地(ヘクタール)	輸出総額(1千)	輸出全体の率(%)
バナナ	1,769,000	80,000	88,900,000	62.0
コーヒー	33,593	105,000	17,500,000	12.2
ココア	31,677	156,500	21,800,000	15.2
米	115,700	85,000	2,300,000	1.6
砂糖	66,767	44,000	2,100,000	1.5

第4表 農 産 物 量 と 輸 出 割 合 い

バスも多数走っている。これらの道路はよく舗装されたところもあるが 円礫を敷きつめた部分も多い。一度キトーからコロンビア国境に近いトルカン(Tulcan)までジープを走らせたが その大半の道路は円礫が敷つめてあり この上を時速60km以上で7時間余り走り続けたときは 胃のぐあいが悪くなり食事がのどを通らなかった。この山岳地帯を縦断するパン・アメリカン道路は 標高2500~3500m位の高原を上り下りしながら走るため 高度差による気圧変化が耳のこまくに痛いほど伝わってくる。またバスの窓から手をつき出しても空気が稀薄なため 空気の抵抗が低地を走るときに比べてずっと少なく感じられる。この他飛行機を利用すれば 国内旅行が容易であるが 比較的便が少なく 飛行場の設置場所も限られている。またこの国では 軍隊の飛行機も旅客輸送をしておりこれを利用すれば 一般の航空会社に比べて運賃は安いが安全性については保証の限りではないらしい。

産業 エクアドルは地理的環境や交通などの関係から農業国の域に止まり 鉱工業の発展が遅れてはいるが 一応輸出入の均衡は保たれており 経済的には安定している。

(1) 農 業

この国の総面積の約75%は未開の森林におおわれており約4.5%が開かんされているに過ぎない。しかし農業はこの国の産業の主要な位置を占め 労働人口の50%が農耕に従事し 輸出の大半は農産物である。おもな農産物としては バナナ コーヒー ココア 米 砂糖きび等で その生産は第4表にみられるようなものである。

バナナはこの国の外貨をかせぐ最も重要な果物で最近 は南米産バナナとしてわが国の店頭顔に顔をみせている。

一時台湾からのバナナが輸入禁止になったとき エクアドルのバナナが幅をきかせたが 原地では1本1円から1円50銭位の値段で売られており 上流階級の連中は労働者の食べるものと心得ているらしく ホテルなどで余りがつがつ食べないようにと注意された。ここでエクアドルバナナのためちよっと弁明しておく と 確かに日本では台湾バナナに比べて味が落ちるが これは積み

出しのときのバナナの熟度(熟した度合)によるのであって、バナナの種類や品質によるということではないつまり輸送距離の関係から台湾バナナは熟度70で積み出すのに対してエクアドルバナナは30程度で出荷するため味が落ちるのだそうである。しかし実際はこれだけではなさそうで、バナナにも大きいものから小さいものまでさまざまな種類があり、小さいものほど甘味がまずようで、大きいものほどまずい。この大きいバナナは現地では油でいためて副食にするが、どうもこの種のバナナが輸入されているらしく、中位の大きさの味の良いバナナはこちらに来ていないということも原因しているようである。バナナが輸出のトップを占める前はココアの栽培が盛んで“金の種(pepa de oro)”とまで呼ばれていたが、20世紀後半から害虫に荒されたりその他の影響で生産量は減少してきている。コーヒーの生産は以前ココアに次いでいたが、1930年代の値段低下で産出量は減少した。しかし最近はインスタントコーヒーなどの需要により、その栽培が再び盛んになってきている。

(2) 鉱工業

エクアドルは労働人口の約5%が鉱工業に従事している程度で、著しくその発達が遅れている。工業は食品関係、織物、化学、製薬などが主要なもので、この他見るべきものがない。このため外資導入については非常に積極的であり、また特典も多いと聞いている。

鉱業については後で詳しく述べるが、石油、金、銀等が採掘されているが、金属鉱山で現在稼行しているのはポルトベロ(Portovelo)鉱山のみといった現状である。

(3) 電力

これまで発電の主要な動力源として石油を使用してき

たが、最近は電力の不足から水力発電所建設の要望もたかまっている。この電力不足が工業発展の障害の一因となっているが、鉱工業の貧困と相まって一種の悪循環をくり返す傾向にあるようである。ちょうどリオパンバに行ったとき、このまちで水力発電所を建設中であったが資金が不足して工事を途中で止めているので、日本から援助してくれないかという話も聞いた。ちょっと日本では考えられないケースであるが、万事こういう風へのんびりした調子である。

その他 エクアドルは他のスペインの旧植民地と同じく、カソリックが非常に盛んであり、新教の食い込む余地も無いといった状況にあり、キトーでの寺院の数は相当なものである。教育は小学校は義務教育で、コレヒオ(Collegio)と呼ばれる中学校、高等学校を兼ねた過程から大学に進むようになっている。大学は数少なく、キトーの中央大学を訪れたときの話では、化学部に地質学科を設けたが、教授がいなくて困っているとのことだった。また面白いことは大学の授業は早朝の午前7時から9時までと、午後5時から8時頃までの2回に分けて行なわれ、教授はその間の午前9時から午後5時までには他の官庁とか会社などで働いているという。これは大学の給料が安いからだそうである。

今一つの問題は労働事情と賃金であるが、この国には失業者が相当数いる模様で、日やとい労働者の賃金が1日20~30スークレ(20スークレがほぼ1ドルに相当する)程度で、また労働組合の結成は禁止されているとのことである。勤労意欲は一般に低調といわれるが、実際に現地で人夫を使用した経験では、割合によく働かし、素直にいうことを聞いてくれた者が多かった。

(筆者は鉱床部)



ケベード付近のバナナ園



海岸地帯ジャングル中に住む はちゅう類(この肉は非常においしく“山の雞”と呼ばれている)